● さまざまな生活道具 2 ●

■行火（番屋炬燵）

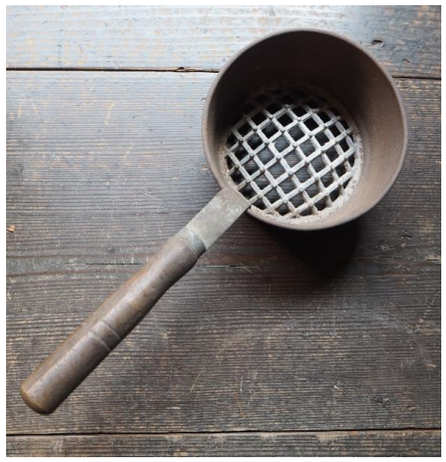
行火は一人用で、持ち動かせる暖房器具の一つ。布団などに入れ手足に当てて暖をとる。地域や世代によっては「こたつ」と呼ばれることもある。熱源は木炭・炭団・豆炭が用いられた。

■湯たんぽ

日本には室町時代に入ったとされ、古くは陶器製が主で、金属製のものが現れたのは大正期以降。戦時中は金属が貴重となったため、陶器製のものが使われるようになる。陶器製の湯たんぽは、保温性が良く遠赤効果もある。

■炭火おこし →

中に炭を入れて、そのまま火をかけることができる。取手がついているため、そのまま持ち運び



■台十能 ↑

炭火を入れたまま床に置くことができる台付きの十能。炭火を運ぶものは、金属製の鍋型容器に木製の柄がつき火をかきおこすためにはスコップ型の道具を使い、両者を合わせて十能という。江戸時代初めに考案。

■火のし（左）・炭火アイロン（右）

中国から江戸時代中頃に金属製の片手鍋のような容器に熾き火にした炭を入れ、この熱と容器の重みで布のしわをのばす火のしが伝えられ、炭火アイロンは明治時代に普及した。どちらとも電気式アイロンが普及する昭和 30 年代頃まで使われていた。